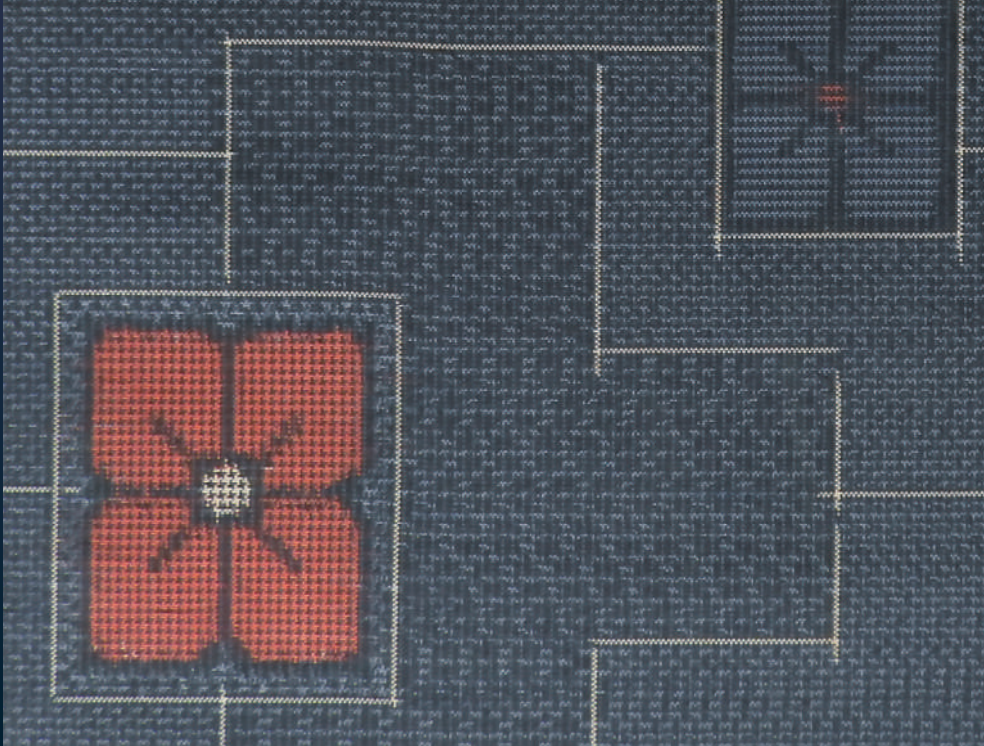
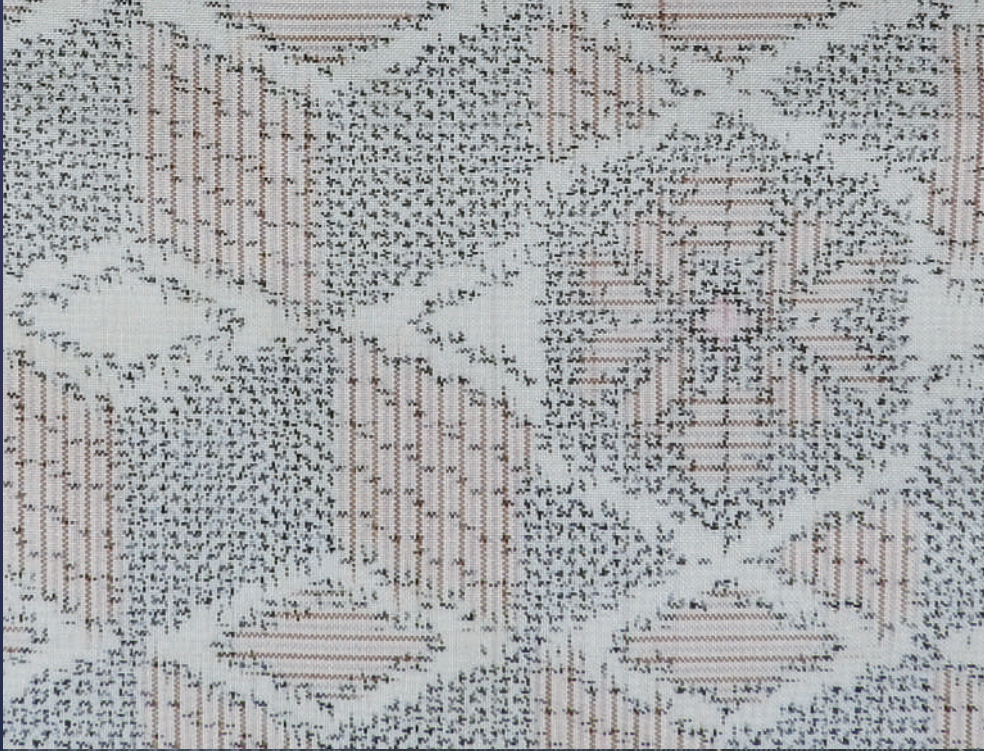


みずほを学ぶ

村山大島紬



1 村山大島紬の歴史 - 織りと染めのまち瑞穂 -

村山大島紬は、瑞穂町と武蔵村山市を中心に作られた絹織物です。多摩地域では江戸時代から養蚕や織物が盛んでした。絹糸は外国に輸出するために八王子や横浜へと運ばれました。織物は絹と木綿を織り交ぜた青梅縞や藍染め木綿の箱根縞などが織られていて、江戸時代から質の高い織物を生産していました。

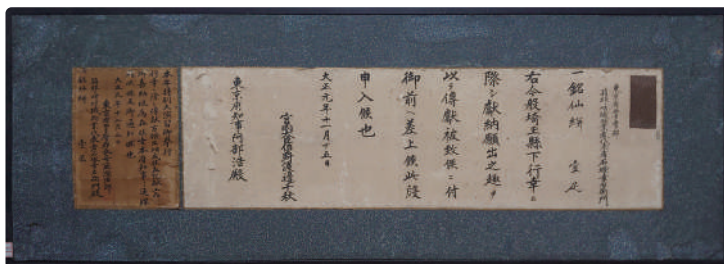
村山大島紬は、明治時代に多摩地域で作られていた木綿織物の村山緋と、太織など絹織物の技術がもととなっていて、地域の人たちは、より品質の高い織物を作り出そうと努力しました。そして、大正時代に群馬県の伊勢崎から緋板を使って糸を染める技術を学び、絹織物である村山大島紬が完成しました。

村山大島紬の特徴は、緋板を使ってたて糸とよこ糸を染める、板締染色という方法が使われていることです。このため、一つの織物を作るためには、緋板を彫ったり糸を染めたりする職人、染めた糸を機織り機に準備する職人、機織りや検査をする人など、多くの人の手が必要でした。そのため、瑞穂町や周辺の地域では、村山大島紬に関わる仕事をしている人がたくさんいて、残堀川では染めた糸を洗う人々が集まり、街中では機織りの音が聞こえたそうです。

村山大島紬は高い技術が評価されて、昭和42年(1967)には東京都無形文化財、昭和50年(1975)には、通産大臣(現在の経済産業大臣)指定の伝統的工芸品に認定されました。



箱根縞の着物



銘仙緋献上額

大正天皇の埼玉行幸に際して献上され、村山大島紬のもととなった銘仙緋。

2 村山大島紬 - はれやかな色と柄がら -

紬つむぎは本来、真綿まわたから紡つむいだ糸おで織ぬられる布地ぬのじのようですが、村山大島紬には絹きぬ糸いとが使つかわれています。絹きぬ独特どくとくの光沢こうたくのある布地ぬのじと、名前の由来あまみおしまとなった奄美大島あまみおしまなど、鹿児島県奄美群島かごしまあまみぐんとうで生産せいさんされる「大島紬」に似た柄がらは、出かける時のおしゃれおしゃれ着きとして人気が高く、最盛期さいせいきには東京とうきょうをはじめ各地かくちしゅつかに出荷しゅつかされました。



村山大島紬アンサンブル
女物（左）／男物（右）



村山大島紬着物
女物

村山大島紬アンサンブル
女物

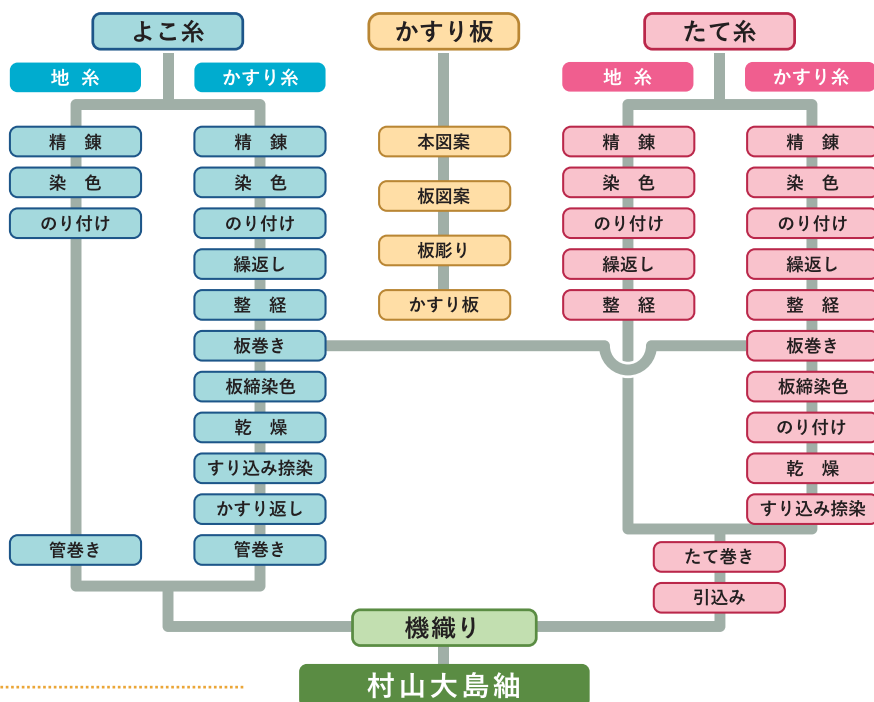
※アンサンブルとは、同じ布地したを使って仕立てた着物はおりと羽織はおりのセットのこと。

※村山大島紬の男物もんようは、文様がらが細かく落ち着いた柄がらが多いのに対し、女物きせつは、季節きせつの草花さかもんようや幾何文様がらなど柄がらも大小様々で、多彩たさいである。

3 村山大島紬ができるまで

村山大島紬の製作工程図

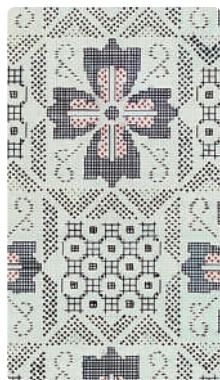
製作工程は40にもなり、専門的な職人が分担して仕事をを行いました。ここでは、主な製作工程を紹介します。



かすりいた 拵板を作る

村山大島紬の特色の一つは、拵板を使用して拵糸を染める板締染色の工程にあります。この技術は、大正時代に群馬県の伊勢崎地方から取り入れられ、村山大島紬の生産に合うように改良されてきました。拵板を製作する職人の中には、伊勢崎地方から移り住んできた人もいました。

拵板は、板屋と呼ばれる職人の工場で作られました。板屋では、織りたい布地の柄を方眼紙に書き込んだ図案(板図案)をもとに、ミズメザクラやカエデの板に溝を彫ります。たて糸を巻くためのたて板と、よこ糸を巻くためのよこ板を作りますが、柄によっては100枚をこえる板が必要になります。



① 板図案



② 図案をもとに線を引く



③ 拵板に溝を彫る



④ 組みあがった拵板

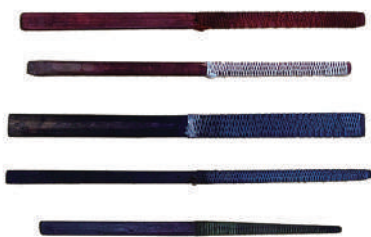
いたじめせんしょく
板締染色

絹糸に色を付ける工程は、染屋が主に行いました。板巻きの行なわれた緋板は、厚い板と太くて長いボルトでしっかりと締められ、染料に浸されます。こうすることで、緋板の溝の部分にだけ染料が流れ込み着色することができます。地糸は手作業で染料に浸し色を付けます。

板締めによって染められる色は、一種類のみに限られます。他の色は、糸を巻いた捺染棒を使用して必要な個所にすり込みます。この工程をすり込み捺染といいます。



かすりいと
 染色された緋糸



なっせんぼう
 捺染棒



① 繰返し

たて糸とよこ糸をそれぞれ枠に巻き取り、染色までの工程を容易にする。



② 整経

整経台に糸をめぐらして、長さを整える。



③ 板巻き

たて糸とよこ糸を緋板に巻き、重ねる作業。



④ 板締染色

熱した染料を長柄杓を使って板締めした糸に注ぐ。



⑤ 地糸の染色

※ 捺染棒とは、糸を巻いた棒のことで、二本一組で使い、染料を付け緋糸の色の染まっていない部分にすり込んで着色する。



⑥ すり込み捺染

はた お 機織り

村山大島紬の製作には、専用の高機が使用されました。戦後、機械化が進むまでは、機を織るのは家の女性の仕事でした。染め上がったたて糸とよこ糸、地糸などを組み合わせ、目的の柄を出す技術を身に付けるまでには、若いころから始めて長い時間がかかったといえます。高機は、機屋から貸し出される場合もありました。女性たちは付き合いのある機屋などから仕事を受けて、機織りに精を出しました。



機織りにはげむ女性



たてま 縦巻き

たての拵と地糸の柄を合わせて、機で織れるよう巻き上げる。



かすりかえ 拵返し

染色の済んだよこ糸を、管巻きできるように一本ずつ分配する。



はた お 機織り

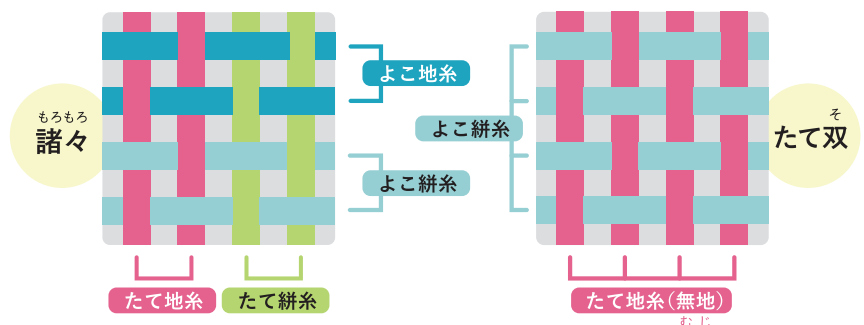
たて糸の柄によこ糸を合わせて織るためには熟練した技術が必要とされる。



けん さ 検査

織り上がった反物を組合でけんさひんしつたも 検査して品質を保つ。

村山大島紬の織り方には、諸々、片諸、たて双、よこ双などがあります。いずれの技法もたてよこの拵糸と地糸の組み合わせによって構成されています。この他に、総拵といって地糸を使用せず、たてよこすべて拵糸のみによって織られる技法もみられます。



4 村山大島紬の伝統を受け継ぐために

村山大島紬は、多くの人たちの手を経て生産され、地域の産業として根付いていきました。こうして生まれた技術は複雑なため、一度失われてしまうと、復元することができない工程もあります。生活様式の変化などによって、おりものさんぎょう ささ にな てき ふそく 織物産業を支えてきた担い手が全国的に不足し、村山大島紬もその存続が危ぶまれています。

瑞穂町では、現在、村山大島紬に携わってきた職人や技術者の方々によって、村山大島紬伝承会が作られています。町の伝統的工艺品である村山大島紬を後世に伝えることを目的とし、機織り体験や染色体験などの指導を通じて、織りや染めの技術を小学生から大人まで広く伝える活動をしています。

織物が盛んだった時代には、織物の上達や商売繁盛を願う信仰が広まっていた。箱根ヶ崎の狭山神社の境内には、機神社の石の祠があり、天雅日女命、棚機姫神、たくはたちひめのみこと えど 栲機千々姫命をおまつりしています。江戸時代の終わり頃、箱根ヶ崎で箱根縞を織る人が、現在のあきる野市伊奈に機神様をまつる宮があると聞き、創建したのがはじまりといわれています。現在の祠は、昭和37年(1962)に建てられています。長いあいだ織物に関わる人々の信仰を集め、毎年4月26日の縁日に行われた祭礼には、多くの参詣がありました。現在この祭礼は、村山大島紬伝承会を中心として行われています。



村山大島紬 生地見本

瑞穂町や武蔵村山市などで織られていた生地の見本。技術が最も進歩した1960年代から70年代にかけてのもの。



機神社祭礼



機神社芳名簿

1960年から70年代にかけての祭礼参拝者の記録。

おりもの せいさく
当町小山織物工場と、しまかつ織物製作の村山大島紬

村山大島紬を知るために

町内の施設

瑞穂町図書館 / 瑞穂町郷土資料館けやき館

図書資料

- 『村山織物誌』(村山織物協同組合、1939年)★
- 『瑞穂町史』(瑞穂町、1974年)●★
- 『村山大島紬』手わざ3(源流社、1977年)★
- 『村山織物史』(村山織物協同組合、1982年)●★
- 『東京の伝統工芸品』(東京都労働経済局、1994年)●
- 『関東の伝統工業』北俊夫(国土社、1996年)●
- 『武蔵村山市史 通史編 下巻』(武蔵村山市、2003年)★
- 『村山大島紬 平成19年度特別展解説書』(武蔵村山市教育委員会、2007年)●★
- 『かすりを織る』小林桂子(日貿出版社、2018年)●

映像資料

- 『東京の伝統工芸品 第14巻 村山大島紬』(東京都産業労働局、1988年)★
- 『東京都指定伝統工芸品 村山大島紬～伝統の技を受け継ぐ職人達の手しごと～』(ジェイ・クルー、2018年)●

- は、瑞穂町図書館所蔵の資料です。
- ★は、瑞穂町郷土資料館収蔵の資料です。

この冊子は、株式会社IHI瑞穂工場および青梅信用金庫から
寄付を受けて作成しました。

みずほを学ぶ 村山大島紬

発行日 | 令和4年(2022)3月21日

発行 | 瑞穂町教育委員会

編集 | 瑞穂町郷土資料館けやき館

